



Title	書籍デザインの転換期：“The Art of Book”（1914）を手掛かりに
Author(s)	今井, 美樹
Citation	デザイン理論. 2026, 87, p. 124-125
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/103742
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

書籍デザインの転換期

— “The Art of Book” (1914) を手掛かりに

今井 美樹 大阪工業大学

はじめに

“The Art of Book: A Review of Recent European and American Work in Typography, Page Decoration & Binding” は、1914 年にロンドンのステューディオ社 (The Studio Ltd.) から発行されたブックデザイン・レビューである。書籍に関わる書体、版組、挿絵、装丁について、イギリスはじめ欧州 6 カ国及びアメリカの論評と主要な図版が掲載されている。各国いずれも自国の書籍デザインの近代的な発展にウィリアム・モリスの影響がある旨を記し、範例となる図版もそれに類する伝統的な書籍デザインが主である。

確かにプライヴェートプレス運動は、商業的な利益を目的とせず、「理想の書物」の追求に始まり、アーツ & クラフツ運動の理念と連動して 1890～1920 年頃まで存続していく。しかし 1914 年という時期を鑑みれば、モリスの没後から約 20 年を経て、工業化社会に突入し、出版界を取り巻く環境も大きく変化する時代である。

本発表は、“The Art of Book” の記述と図版を手掛かりに、プライヴェートプレスに端を発する書籍デザインが、20 世紀初頭の欧米でどのように展開したのかを明らかにし、その表現と技術について考察する。

欧米各国の出版事情

出版産業に特徴的な欧米 4 カ国の事例を挙げる。

イギリスでは、17～18 世紀にかけて完成されたローマン書体の活字群が 1890 年代までの主流とされ、その後に多くの個人印刷所が設立され独自

の活字を設計するようになる。ランストン・モノタイプ社の機械式活字鑄造・製版システム (1897) は評価されるものの、精度が低い機械版組が多く、職人の手組版に比べて見劣りするとされ、エドワード・ジョンストンはセントラル・スクール・オブ・アーツ・アンド・クラフツで教鞭を執り、カリグラフィに立ち戻り機械化によって失われた文字本来の美しさを復権させようとした。製本に至っては、機械化が進むことで高級装丁の需要は減り、製本職人はアメリカの富裕層からの依頼に活路を見出していた。

ドイツは、イギリスに比べ書籍の産業化に積極的で、工業化への影響による変化が論じられている。ライプツィヒ万博 (1887) の時点では活版印刷に関わる装丁家・植字工・印刷工は産業人であって、「芸術と産業の相互影響は不要」という立場を取っていた。パリ万博 (1900) の頃にはユーゲントシュティルに則ったエックマン書体を経て、1914 年にはライプツィヒで「国際書籍商・グラフィック展 [Bugra]」が開催され、芸術と産業の融合を意識することで初めて「単なる装飾から真の書籍芸術へと進化」と論じている。イギリスのアーツ & クラフツ運動に影響を受けながらも、製本・装丁に関しては、経済的・文化的な観点から大量生産を念頭に、板ボールを使った単純な機械製本を主体にしながら、高級製本にも備えられる体制を整えた出版社もあった。

フランスでは、17～18 世紀の書誌学・印刷術の功績に比べれば、近年の書籍芸術の活動は特筆すべき変化が少なかったようである。当時はどの

街路にも必ず「装丁工房 (relieur-doreur ルリユー・ドルール)」があったが、これは1686年の王令によって、書籍商と製本職人との間に出版工程の明確な分業が定められたことに由来し、伝統的な製本業・装丁業は20世紀半ばまで続く。さらに「書物の友協会 (Société des Amis des Livres)」, 「100人の愛書家 (Les Cent Bibliophiles)」, 「ノルマンディ挿絵入り書籍協会 (Société Normande du Livre illustré)」, 「現代書籍芸術協会 (Société du Livre d'Art Contemporain)」といった愛書家の団体が豪華書籍を芸術家に注文し、会員に頒布するシステムが確立しており、ヴォアラール画廊が発案した芸術家のオリジナル版画を付けた限定本「リーヴル・ダルティスト」もこれに類する。

アメリカにおいても、モリスやダブズ・プレスの主宰者コブデン＝サンダーソンらの影響を受けて、1900年から10年間で書籍デザインのクオリティが高まった。機械による大量生産を前提に、印刷と製本の分業を廃止し、印刷、表紙デザイン、挿絵等の工程を一人の担当者が計画・管理する「完全製造」方式を採用することで、商業出版物の品質維持と経済性を実現した。一方、このような標準化とは異なり、高級製本は中産階級の個人注文や教育振興のための慈善家による図書寄贈の注文に対応し、イギリスに倣った装丁がなされた。

「ステューディオ」誌の編集方針

チャールズ・ホーム(1848-1923)は44歳で貿易商を引退し、「美術と応用芸術の絵入り雑誌」と銘打った「ステューディオ」を1893年に創刊した。創刊号には新進気鋭のピアズリー作品が掲載され、早い時期からパリやニューヨークにも支店が展開されるなど、時流に乗った斬新な雑誌として認知されがちだが、20世紀を迎えてもお自国のアーツ&クラフツの精神を堅実に守る保守雑誌として存続していた。

初代編集者グリーソン・ホワイト(1851-1898)は、気鋭の雑誌を目指した訳ではなく、小さな町

や田舎にも美術や議論を届けることを目標にしていた。田舎育ちの彼自身の体験として、芸術や文化に触れる手段が書物や雑誌だったことから、中流階級の美術愛好家やアマチュアの嗜好にも合わせた編集をする必要があり、アーツ&クラフツは最適なテーマだった。反面、美術分野の極端な傾向(アカデミズムと前衛美術)を避け、新印象派やポスト印象派を無視し、代わりに「装飾的な」美術様式を志向し、家庭内に美しく飾り鑑賞でき、政治的・心理的な問題や挑発から距離を置くスタンスで編集を行い、1910年を過ぎてもアーツ&クラフツの主題が掲載され続けた。

おわりに

1914年の“The Art of Book”に見る欧米の出版産業には、各国の経済事情や国民意識、とりわけ機械化に対するスタンスが見て取れる。

24年後の1938年に再び「ステューディオ」の書籍特集が発行されるが、その折には国別の記述ではなく、書体デザイン、文字組みとレイアウト、書体のサイズとウェイト、文字間と行間、マージン、といった紙面設計に関するカテゴリで論じられていることから、大戦間に書籍に関するデザインの実践が共通認識となり、国家主義的な装飾性から、書籍に必須な機能性として認識されていることが推測される。

その前段として、1914年時点の書籍デザインは国民性から産業化への転換期に当たると捉えることができる。